

# 北イタリア・ピエツラからの移民に関する一考察

— 移民と職業的紐帯 —

北村 暁夫

## 1. はじめに — 方法論的前提 —

イタリア近代史において、国境を越えて働きに出る行為＝移民が、全国的かつ大規模に行われていたことは周知の事実である<sup>(1)</sup>。しかし、なぜかくも大量の移民が発生したか、移民とは一体いかなる存在であったのかを説明する方法は一律ではない。従来の議論を整理するならば、二つのアプローチに大別されるように思われる。

一つは、農村の人口過剰、あるいは小土地所有に立脚した農業や職人的な労働に基づく伝統的手工業の危機といった要因、すなわち一言で言えば、イタリア資本主義の進展に伴う伝統的農村の「解体」に移民の発生を求めるアプローチである。この種の議論は、既に大量移民の同時代人によってもなされており、L. ボディオ Luigi Bodio や R. フォースター Robert Foerster などの研究をあげることができるが<sup>(2)</sup>、1979年に出版された E. ソーリ Ercole Sori の『統一から第二次世界大戦にいたるイタリア移民』に現在の研究水準を見ることができよう<sup>(3)</sup>。「世界資本主義体制下における労働力の不均等に移民の原因を見る」というグラムシの理論に示唆を得たソーリは、移民の送出国であるイタリアと、受け入れ国であるアルプス以北のヨーロッパ諸国及び南北アメリカの、双方の労働市場の展開を丹念に例証することによって、イタリアにおける農村からの余剰労働力の析出＝プッシュ要因のみならず、受け入れ側の労働市場の変化＝プル要因も移民発生の重要な要素であることを明らかにした<sup>(4)</sup>。昨今の世界資本主義システム論の興隆は、さらに、このプッシュ要因とプル要因という二分法に立脚して双方を別個に分析するという方法を克服して、労働市場間の有機的連関に着目した世界労働市場のトータルな把握のもとに「移民」を分析することを要請していると思われる<sup>(5)</sup>。だが、ひとまずソーリの議論は、50年にも及ぶイタリア大量移民の歴史を整合的に説明する論理を提供していると言える。

しかし、移民史をイタリア資本主義の発展のロジックから説明しようとする態度——これをマクロな分析と呼ぶことができよう——は、一つの論理で歴史を分析するというメリットを有する一方で、いくつかの重大な方法的限界をはらんでいる。その一つが、ともすれば地域的多様性を捨象してしまうという欠陥である。特にイタリアのように地域的多様性が大きく、地域間における資本主義の不均等な発展が「南部問題」という固有の問題を生じせしめている国家において、各地域の移民を「資本主義の発展に伴う農村の解体」という単一の論理で説明することがどこまで妥当であるかは、慎重な検討を要する問題であろう。もう一つは、マクロな視点による分析が常にはらむ方法的限界であるとも言えるが、移民を世界労働市場の一ファクターとして扱うがゆえに、しばしば移民をした個々の人々が、資本主義の展開に身をさらす受け身で不安定な存在として扱われ、移民自身の主体的意志、行動が捨象されてしまうという点である。

移民研究における地域的多様性と移民自身の主体性というこの二つの問題関心に立脚し、ごく限定された地域を対象にして移民の行動を分析する方法——ミクロな分析と呼ぶことができよう——が、移民研究における第二のアプローチである。こうしたミクロな分析が、イタリア移民史研究において登場するのは、ようやく1980年代に入ってからである<sup>(6)</sup>。その研究史的な背景として、1970年代に特に進展した三つの研究の流れを指摘できよう。

第一は、アメリカ合衆国をはじめとして、カナダ、アルゼンチン、オーストラリア、さらにはフランス、イギリス、ドイツなど、イタリア移民を受け入れた国々におけるイタリア系コミュニティ研究である。エスニック・グループ研究の全般的な進展にともなって、イタリア系コミュニティの研究も盛んになったが<sup>(7)</sup>、血縁、地縁を頼って移民をする人々——いわゆる「連鎖移民」——のメカニズム<sup>(8)</sup>や、受け入れ地域の政府、海運会社などによる組織的な移民徴集のメカニズムが存在するために、受け入れ地域のあるコミュニティにおいては、イタリアの特定のコミュニティからの移民が集住するという傾向がある。したがって、受け入れ地域のコミュニティ研究の一層の進展のために、移民を生み出したイタリアにおける地域研究を行うことが要請されるにいたったのである。

第二は、イタリアを対象にした社会人類学研究である。1970年代には、A. ブロック Anton Blok や、シュナイダー夫妻 Jane / Peter Schneider、S. シルヴァーマン Sydal Silverman など、南部ないし中部イタリアの特定のコムーネを対象に、家族、親族構造を調査した英語圏の人類学者の著作が連続と刊行された<sup>(9)</sup>。この一連の研究は、人類学における「冷たい社会」から「熱い社会」への関心の移行、より正確に言えば「冷たい社会」から「熱い社会の中で相対的に冷たい社会」すなわち産業化社会の中で相対的に産業発展の度合いの低い社会への関心の移行を反映したものであるが<sup>(10)</sup>、こうした研究が対象にした地域においては多かれ少なかれ、移民という現象が社会にダイナミズムを賦与する一大要因であるために、移民に関心が向いていくのは当然の成り行きであった。移民と家族、親族構造の関連を研究した F. ピゼッリ Fortunata Piselli、M. ミニクーチ Maria Minicuci や、一コムーネにおける移民と人口動態の相関を研究した W. ダグラス William Douglass など、1980年代を代表するモノグラフを著した研究者が、いずれも人類学出身であるのも偶然ではない<sup>(11)</sup>。

第三は、ミクロ・ヒストリー研究である。1970年代には、トリノのエイナウディ社から、C. ギンズブルグ Carlo Ginzburg と G. レーヴィ Giovanni Levi を監修者として、ミクロ・ヒストリーのシリーズの刊行が始まった。レーヴィの言葉を借りれば、ミクロ・ヒストリーとは視点を「ミクロ」な位置に下げることによって、従来看過されてきたものを捉え直す方法的態度のことであるから、いわゆる「地域史」とは全く別個のものであり、両者は峻別されねばならない<sup>(12)</sup>。しかし、視点を「ミクロ」な位置に下げるとは、従来ナショナルなレベルで把握されてきたものをローカルなレベルで問い直すという作業をしばしば伴うのであって、その限りで「地域史」と無縁なものではない。しかもイタリアでは、歴史研究が中央集権的な性格を持ち、「南部問題」という大テーマを除けば、地方史研究が国家史の諸問題の縮小再生産に留まってきたという経緯があるだけに<sup>(13)</sup>、ミクロ・ヒストリーは「地域史」研究の方法的革新に与るところ大であった。近年は、「ミクロ」な視座による意欲的な「地域史」研究が生み出されつつある<sup>(14)</sup>。

この三つの研究の流れに影響を受けながら、近年は移民研究においても、特定の地域を対象にしたミクロな分析手法が隆盛を迎えようとしている。

しかし、この第二のアプローチには、第一のアプローチを裏返した形での問題点が生じる。ミクロな分析は、州から県へ、県から郡へ、郡からコムーネ（市町村）へ、コムーネから地区へと、対象を限定すればするほど研究の密度、精度が高くなるであろうが、同時に過度の個別化、細分化を招くことにもなりかねない。「木を見て森を見ず」という言葉は、ミクロな手法をとる際に誰もが心しなければならない警句であろう。対象地域に固有な事項と普遍化可能な事項を峻別しつつ、対象地域を「全体」と連関させていく努力をしなければ、単なる好事家的な研究に終わってしまう可能性がある。さらに、移民とは出身地→旅の行程→移民先という過程から成る「運動」であるという事実が、他の「地域史」にはない問題を生じる。移民が、この三つの過程からなる以上、ミクロな研究も本来その三つの過程を追うことで完成されるはずである。しかし、ただでさえ史料収集の難しい移民史におい

て、この三つの過程をフォローしうる史料群を収集することは技術的に困難である。ましてや、イタリア移民のように移民先から帰国するケースが多い場合は、研究に一層の工夫が必要となろう。

こうした問題点を認識した上で、これからのイタリア移民史研究は複眼的な分析、すなわちマクロな背景——イタリア資本主義の形成と発展、移民政策の変遷など——を前提として考慮に入れながら、地域を限定したミクロな分析を行っていくことが不可欠であると筆者は考える。しかし、この分野では研究の歴史が未だ浅いこともあって、比較検討に足るだけの地域研究は圧倒的に不足している。

イタリア北部、ピエモンテ州のピエツラ郡 (Circondario Biella) の移民史に関する共同研究は、その点では例外的に豊富で貴重なデータを提供している。イタリア統一から第二次世界大戦にいたる時期を主な対象とするピエツラ移民の共同研究は、1980年代初頭に開始され、ここ数年幾多の研究成果を刊行している<sup>(15)</sup>。移民史研究のみならず、歴史研究全般において共同研究という発想の稀なイタリアにおいては、質、量ともに群を抜いており、イタリア移民研究における現在の水準を示していると言えよう。史料的にも<sup>(16)</sup>、従来の移民史研究で用いられてきた統計資料や同時代人の観察などに加え、コムーネに保存されている戸籍やパスポート発行許可証 (Nulla osta) を丹念に調査し、また高い識字率を背景に多数発行されている地方紙の分析<sup>(17)</sup>や、移民の残した書簡<sup>(18)</sup>、写真、エクス・ヴォートの収集<sup>(19)</sup>、現存の移民経験者へのインタビューを行うなど、共同研究の特徴を生かした意欲的な試みをしている。

ピエツラ郡は、ピエモンテ州の北部に位置し、北、西部にアルプスの山並が控える丘陵、山岳地域である。郡の中心都市ピエツラの標高が420メートルで、第一次世界大戦前には全郡で96を数えたコムーネ (現在は85コムーネ) の8割以上が、このピエツラより北側の山間地域を流れるいく筋かの溪谷沿いに展開している。冬の間は雪に閉ざされるこの山間地域では、他のアルプス地域と同様に、移民は長い歴史的伝統を有する営為であった<sup>(20)</sup>。

この小稿は、ピエツラ移民に関する共同研究の成果を検討、批判することによって、アルプス地域における移民のメカニズムの一端を明らかにし、それを通じてイタリア移民史研究の現状と今後の展望を明らかにする試みである。

註：(1)統一から第一次世界大戦にいたるイタリア移民の数量的概観については、拙稿「イタリア自由主義期における移民と植民」(『歴史学研究』613号、1990年)を参照。

(2)L. Bodio, L'emigrazione italiana nel 1876. Roma, 1879. R. T. Foerster, The Italian Emigration of Our Times. New York, 1919. 特に、Ch. 5, 6, 7.

(3)E. Sori, L'emigrazione italiana dall'Unità alla seconda guerra mondiale, Bologna, 1979.

(4)Ibid. c. 3, 4.

(5)B. Lozano, The Andalusia-Hawaii-California Migration: A Study in Macrostructure and Micro-history. Comparative Studies in Society and History. 26-2, 1984. p. 305.

(6)地域を限定した研究という意味では、F. レンダのシチリア移民に関する研究や、E. フランジーナのヴェーネト移民に関する研究などを先駆的研究として挙げるができる。F. Renda, L'emigrazione in Sicilia, 1652-1961. Palermo, 1963. (nuova ed.: Roma-Caltanissetta, 1989), E. Franzina, La grande emigrazione: L'esodo dei rurali dal Veneto durante il secolo XIX. Padova, 1976. しかしいずれも、それぞれの対象領域における資本主義の発展と移民の連関を問題にしているという点で、アプローチの方法としては第一のアプローチに属していると言えよう。

(7)エスニック・マイノリティとしてのイタリア系グループに関する各国の研究の現状については、さしあたり次の文献を参照。B. Bezza (a cura di), L'Italia fuori d'Italia, Milano, 1983., L.

- Tomasi(ed.), Italian Americans: New Perspectives in Italian Immigration and Ethnicity. Staten Island.1985., F.J.Devoto/ G.Rosoli (comps.), La inmigración italiana en la Argentina, Buenos Aires, 1985., J.B.Duroselle / E. Serra (a cura di), L'emigrazione italiana in Francia prima del 1914, Milano,1979.日本における研究としては、さしあたり山田史郎「移民の為の教育、地域のための教育」、村上真弓「移民の『同化』とイタリア人集合体」(いずれも、谷川稔ほか『規範としての文化』平凡社、1990年所収)。
- (8)移民連鎖に関する近年の研究の進展は目ざましいが、ここではイタリア移民の連鎖に関する研究を整理した二つの論文を挙げておく。F.J.Devoto, Las cadenas migratorias italianas: Algunas reflexiones a la luz del caso argentino, Estudios migratorios latinoamericanos, 8, 1988. Id.,Qualcosa di più sulle catene migratorie degli italiani in Argentina, Società e storia, n.52, 1991.
- (9)A.Blok, The Mafia of a Sicilian Village, New York, 1974., J.Schneider/ P.Schneider, Culture and Political Economy in Western Sicily, New York, 1976., S.F.Silverman, Three Bells of Civilization: The Life in a Sicilian Hill Town, New York, 1975.
- (10)M.Minicuci, Qui e altrove:Famiglie di Calabria e di Argentina, Milano, 1989,pp.10-11. 宇田川妙子「famigliaとfurberia: 南イタリア村落社会の非集团的分析の試み」(『民族学研究』51巻1号、1986年)。
- (11)F.Piselli, Parentela ed emigrazione, Torino, 1981., M.Minicuci, op.cit., W.A.Douglass, Emigration in a South Italian Town: An Anthropological History, New Brunswick, 1984.
- (12)G.Levi, L'eredità immateriale, Torino, 1985, p.4, AA.VV., Il piccolo,il grande e il piccolo:Intervista a Giovanni Levi, Meridiana,10,1990, pp.219-223.
- (13)C.Donzelli, Il concetto di regione, Passato e presente, 9,1985, p.35.
- (14)代表的な著作として、A.M.Banti, Terra e denaro:Una borghesia padana dell'Ottocento. Venezia, 1989., G.Civile, Il comune rustico. Storia sociale di un paese del Mezzogiorno nell'800, Bologna, 1990. G.Gribaudo, A Eboli:Il mondo meridionale in cent'anni di trasformazioni, Venezia, 1990.
- (15)共同研究の成果として、ここでは以下の著作を上げておく。V.Castronovo et al.,L'emigrazione biellese fra Ottocento e Novecento.Milano,1986. P.Audenino et al.,L'emigrazione biellese nel Novecento, Milano, 1988., F.Rosoli et al., Identità e integrazione:Famiglie, paesi, percorsi e immagini di sé nell'emigrazione biellese, Milano, 1990., P.Corti, Paesi d'emigranti:Mestieri, itinerari, identità collettive, Milano, 1990., P.Audenino, Un mestiere per partire: Tradizione migratoria, lavoro e comunità in una vallata alpina, Milano,1990., AA.VV., Sapere la strada:Percorsi e mestieri dei biellesi nel mondo, Milano, 1986.
- (16)この共同研究で用いられた史料については、AA.VV.,Premessa, in L'emigrazione biellese fra Ottocento e Novecento, AA.VV.,Premessa, in L'emigrazione biellese nel Novecento. を参照。
- (17)ピエツラで発行された新聞については、C.Ottaviano, L'immagine e le vicende dell'emigrazione biellese nella stampa dell'epoca, in L'emigrazione biellese fra Ottocento e Novecento. を参照。
- (18)ピエツラ移民の残した書簡の一部は英訳されて刊行されている。S.Bailly/F.Ramella(eds.),One Family, Two Worlds.An Italian Family's Correspondence across the Atlantic,1901-1922. New Brunswick-London,1988.またこの書簡を分析したものとして、L.Benigno/F.Ramella,Una famigliae

- un paese: la trama dei rapporti in una storia di emigrazione, in Identità e integrazione.
- (19) 移民の残した写真については、AA.VV., Sapere la strada, op.cit., エクス・ヴォートについては、M.Cordero/D.Albera, Dagli emigranti, per grazia ricevuta, in D. Albera (a cura di), Dal monte al piano, Cuneo, 1991. を参照。
- (20) 他のアルプス地域の移民については、P.P.Viazzo, Upland Communities: Environment, Population and Social Structure in the Alps since the Sixteenth-Century, Cambridge U.P., 1989, P.Corti / A.Lonni, L'emigrazione temporanea in una vallata alpina dell'800, in E. Franzina (a cura di), Un altro veneto, Padova, 1983. Id., La vallée du Chisone, Piémont: émigration, terre et industrialisation (1850-1914), Revue Européenne des Migrations Internationales, 2-3, 1986. R.Merzario, Il capitalismo nelle montagne, Bologna, 1989.

## 2. ピエツラ移民の数量的概観

イタリア統一の1861年のピエツラ郡の人口は 134,486人であった。これは同年のピエモンテ州の人口の4.88%、イタリアの人口の0.51%に相当する。その後のピエツラ郡、ピエモンテ州、イタリアの人口の推移については、表1が示すとおりである。1861年と1961年の二つの時点をとってみると、この百年の間にピエツラの人口は増加しているが、増加率はピエモンテ、イタリアの増加率に比して緩やかである。ピエツラの人口の推移に特徴的な事実は、1901年から1921年の間に人口が減少しており、ようやく1936年に1901年の人口水準に戻ったということである。

このピエツラ郡の人口動態を、より小さな規模の地域で見るとどうなるであろうか。96のコムーネを地理的に隣接するコムーネごとに9つの地域に分割し、各地域の人口動態を見たのが表2である<sup>(1)</sup>。この表によると、ピエツラ郡の人口が増加した1861年から1901年の間は全地域で人口が増加していること、逆に郡全体の人口の減少期である1901年から1921年にかけては、地域7（ピエツラ市とその周辺）を除いて全地域で人口が減少していること、そして1921年以降は地域によって増加に転じた地域と、減少が続いた地域に分れることがわかる。以上のことから、この9地域を3つのグループに大別することができるであろう。すなわち、一貫して人口が増加しているピエツラ市とその周辺、1901年以降人口が減少し続けている地域（地域1、2、5、8——これをA群と呼ぼう）、一時人口が減少した時期もあるが、基本的には人口が増加している地域（地域3、4、6、9——B群）である。

次に移民統計資料からピエツラ移民に関する数字を拾ってみよう。統計資料が利用できる1876年から1920年まで、人口動態と同様にピエツラ郡、ピエモンテ州、イタリアについて見たのが表3である<sup>(2)</sup>。ピエツラ郡からの移民は19世紀後半においては比較的低い水準にあるが、20世紀に入ると急増している。1901年の移民数は同年のピエツラ郡の人口1000人当たり28.5人に相当し、イタリア全体の平均15.8人の二倍近い数字である。

このピエツラ郡の移民動向を、先の人口動態において分割した9地域ごとに見たものが表4である。移民統計では全てのコムーネが列挙されておらず、列挙されるコムーネも年によって異なるので、人口動態のように完全な表は作成できないが、大まかな特徴はつかめる。1901年以降は、ピエツラ郡からの移民の急増にともなって各地域で移民が増加しているが、その中でも増加率が大きい地域が、地域3、4、6、9である。特に地域9（平野部）は、1901年以前は移民がわずかであったにもかかわらず、1901年以降は大量の移民を生んでいる。一方、地域1、2、5は、1860年代、70年代にも比較的多数の移民を送り出している。この二つのタイプ分けは、人口動態におけるタイプ——A群とB群

—にほぼ一致している。すなわち、1901年以降に漸次人口が減少していく地域は、すでに1901年以前から一定の数の移民が存在していた地域であり、1901年から1921年までの間は人口が減少したがその後人口が増加に転じた地域では、移民という現象が比較的新しいということが言えるのである。

これは1901年から1921年の間の移民が人口の流出に直接に結びついていると推察できるのに対して、1901年以前の移民は必ずしも人口流出には結びつかなかったことを意味する。事実、1901年まで統計が行われた永住移民と一時移民の別を見ると、ピエツラ郡では少なくとも1890年代の初めまでは一時移民が圧倒的多数であった（表5）。

移民統計資料はこの他に、移民の行き先、性別、家族同伴の有無、年齢、職業についての記載があるが、いずれも州単位の記載しかない。表6はピエモンテ州の移民の行き先に関する統計である。行き先はフランスが最も多く、次いでスイス、アルゼンチン、アメリカ合衆国などが主な目的地であるが、アルゼンチンは1880年代に入って、アメリカ合衆国は1900年代に入って増加しているのが特徴的である。表7は性別、家族同伴の有無、年齢、職業構成についての統計である。例外的な一時期を除いて、男性が80%前後、単身者が同じく80%前後、15歳以上が90%前後になる傾向を示しており、イタリア全体についてのそれぞれの傾向とほぼ一致している。職業は農民、農業労働者が多数を占めるが、イタリア全体の数字に比べて建築業者、労働者・職人が若干多いのが特徴である。

一方、ピエツラ郡における移民の行き先、性別、職業について、G.バルベリスによる調査結果がある。これは、ピエツラ郡の各コムーネに保存されているパスポート発行許可証を収集、分類し、先の9地域に分けて集計したもので、約9,000のサンプルから構成されている<sup>(3)</sup>。サンプル調査なので移民の構成に多少の偏りがある。とりわけ、1930年から1960年の間の移民が約6,000例と全体の三分の二を占めるのに、1901年以前についてはわずかに14例しか収集されておらず、比較的新しい移民に偏った調査結果であるとの観は否めない。しかし、これは現在入手できるピエツラ郡全体の移民の行き先、職業についての唯一の統計なので、ピエモンテ州の統計史料とつき合わせながら利用することにする。

表8は、移民の行き先と性別についての結果である。行き先では、アメリカ大陸とアフリカへの移民がピエモンテ州の統計に比して多いが、それはこの調査が1930年から1960年の間の移民に偏っていることによるものと考えられる。地域ごとに見ると、地域2、5、6ではヨーロッパ（とりわけフランス）への移民が圧倒的に多いのに対し、残りの地域はヨーロッパとアメリカ大陸への移民が接近しているか、もしくは後者のほうが多くなっている。性別については、どの地域も男性が60%前後を占めている。ピエモンテ州全体では第一次大戦まで80%前後であったのに、それ以降60%代に低下していることを考えると、やはり調査結果の年代的偏りによる結果である可能性が高いと言える。

最後に移民の職業である（表9）。まず一見して明らかなのは、ピエモンテ州の統計に比べて「農民」が極端に少なく、代わりに繊維業者、「労働者」、建築業者の比率が圧倒的に高いことである。また、地域間の差異も極めて明瞭である。地域1、2、5、8では建築業者の比率が高く、地域3、7では繊維業者の比率が高い。前者は人口動態におけるタイプ分けでのA群に一致し、後者は繊維業者と建築業者の比率の拮抗している地域4、6を加えれば、ほぼB群に一致している。この調査結果には年代的な偏りがあるので、何らかの結論を導くためには未だ慎重な検討を必要とする。しかし、地域3、4、5に属するコムーネの19世紀後半の就業人口を示した表10によると、地域3のコムーネでは繊維業者が、地域5では建築業が男性就業人口中の圧倒的多数を占め、地域4では両者が拮抗している。以上のことから、A群の地域は建築業者の移民が多く、B群の地域は繊維業者の移民が相対的に多いという結論を導くことに無理はないであろう。

ここまでの考察をまとめると以下ようになる。移民という現象が早くから存在し、19世紀後半に

はそれが人口の減少には結びつかなかったものの、20世紀に入ると人口が減少し始めた地域は、就業人口に建築業者が多く、移民も建築業者が多く出ている。それに対し、移民という現象が比較的遅く現れ、20世紀の最初の10年ないし20年は移民による人口の減少も見られたが、基本的には人口が増加傾向にある地域は、就業人口に繊維業者が多く、移民も建築業者と並んで繊維業者が多く出て行っているのである<sup>(4)</sup>。これを移民の行き先に重ね合わせれば、前者はどちらかと言えばヨーロッパ、とくにフランスに移民する傾向にあるのに対し、後者はアメリカ大陸に行く傾向が高いということになる<sup>(5)</sup>。以上の考察から、ピエツラ移民においては移民は職業と密接に結びついており、ピエツラで従事している職業が移民のメカニズムに深く影響を与えていることが推察できるだろう。

註：(1)この地域分けは、バルベリスの分類に従った。G.Barberis, Geografia e struttura del movimento migratorio 1920-1960, in L'emigrazione biellese nel Novecento.p.43. 地域分けは以下の通りである。

地域1——チェルヴォ渓谷(Valle Cervo) (11コムーネ)

地域2——チェルヴォ川とストローナ川の間地域(Tra Cervo e Strona) (8コムーネ)

地域3——ストローナ川流域(Valle Strona) (15コムーネ)

地域4——セッセラ川流域(Val Sesslera) (8コムーネ)

地域5——セツラ丘陵(Serra) (7コムーネ)

地域6——エルヴォ川流域(Valle Elvo) (8コムーネ)

地域7——ピエツラ周辺地域(Biella e dintorni) (6コムーネ)

地域8——ブルズネンゴ周辺地域(Brusnengo e dintorni) (5コムーネ)

地域9——ピエツラ平野部(Pianura biellese) (17コムーネ)

この地域分けは1981年現在のコムーネとその境界に対応しているので、コムーネ数は85である。またバルベリスの分類では、地域8に隣接する隣郡の二つのコムーネが含まれているがここでは除外し、逆に彼の分類ではいずれの地域からも除外されている1コムーネをこの地域に加えてある。

(2)ただし、ピエツラ郡に関する統計は、1884年から1915年の間に限って記載がある。

(3)G.Barberis, op.cit., p.36

(4)Ibid., p.21.

(5)Ibid., p.39.

### 3. 建築業と移民

#### (1) 移民の行程

ピエツラは他のアルプス地域と同様に、伝統的に小土地所有者の多い地域である。たとえば、セッセラ川流域のトリヴェーロ Trivero というコムーネの1793年の土地台帳によると、人口1816人(1776年の調査)に対して640人の在地の土地所有者が記録されている。一世帯の平均構成員を5人として計算すると、一世帯あたり一人以上の土地所有者がいることになる<sup>(1)</sup>。山間地域で平地に乏しく地味も悪いにもかかわらず、土地が細分化されているので、通常は自己の耕作地からの農業収入では生活することは不可能であった<sup>(2)</sup>。従ってピエツラの人々は家計維持のために、他の経済活動に従事してきた。建築業や繊維業は、そうした家計補助的な経済活動の一環として長い伝統を持つ。

建築業の場合は、その仕事の性格上、労働現場を求めて移動することがしばしばあった。ピエツラ

の建築業の起源をたどることは困難であるが、ピエツラ郡の中で最も早くから建築業者が地域外に職を求めて移動していた例として、地域1、すなわちチェルヴォ渓谷の上流地域の諸コムーネをあげることができるだろう<sup>(3)</sup>。カンピーリア Campiglia、クイッテンゴ Quittengo、ピエディカヴァッロ Piedicavallo などこの地域のコムーネ出身のれんが工や石工は、早くも16世紀にはミラノのドウオモ建設に従事していたという<sup>(4)</sup>。18世紀には、れんが職人の親方たちが同郷で募集したれんが職人を引き連れて、やはり同郷の請負人から委託された仕事をこなすために、遠隔地に出かけていく光景がしばしば見られた。仕事先は、要塞建造などサヴォイア王国内が中心であったが、スイスやフランスなどのアルプス地域に赴くこともあった<sup>(5)</sup>。

一方、地域5（セツラ丘陵）や地域4（セッセラ川流域）も、家計維持の手段としての移動の伝統を古くから有していた。しかし、チェルヴォ渓谷上流はすでに18世紀の段階で建築職人地域に特化し、移動を伴う建築業の遂行が主たる家計維持の手段となっていたのに対し、これらの地域では移民の日数も距離もごく限られたものであった。セツラ丘陵のコムーネであるサーラ Sala Biellese やトツラツォ Torrazzo では、19世紀初頭に就業人口中の最多数を占めていたのは繊維業者であった。彼らは自らの土地から収穫される麻を原材料として家内工業を行い、家計の補助としていたのである<sup>(6)</sup>。また、セッセラ川流域の諸コムーネも、19世紀前半の段階では林業が主な副業で、木こりや炭焼きなど伝統的な職人層が就業人口の多数を占めていた<sup>(7)</sup>。これらの地域がれんが工や石工などの建築職人の地域へと特化して行くのは、19世紀の後半になってからである。

こうした就業人口の構造転換が起こったのは、麻や炭の需要が減少したことで、家計維持の手段を他の産業に求めざるを得なくなったことが一因であるが<sup>(8)</sup>、それ以上に建築職人に対する労働力需要の増大によるところが大きい。19世紀は都市化と産業化に伴って、道路、鉄道あるいは工場、住宅の建設など、ヨーロッパ各地で建築ブームが起きた時代である<sup>(9)</sup>。ピエツラを含むピエモンテ山間地域にとって、この建築ブームの先駆けとなったのが、ナポレオン期に開始されたモンズニ峠やシンブロン峠などアルプス地域における道路、トンネル建設であった。大規模な公共事業は多くの労働力を必要とし、セツラ丘陵やセッセラ川流域からも多くの男性が建築労働者として雇用された<sup>(10)</sup>。事業の規模は大きければ大きいほど継続年数も長かったので、彼らの移動も定期的なものとなり、春に労働に出発し、秋に帰還するという季節労働として定着した。彼らは、定期的に建築労働に従事していく中で熟練度を高め、次第に彼らが伝統的に従事してきた繊維業や林業を放棄して、建築職人として専門化していったのである<sup>(11)</sup>。

早くから建築職人の地域として特化していたチェルヴォ渓谷をはじめとして、これらの地域に特徴的なことは、職人たちの専門性の高さである。チェルヴォ渓谷の石工の石切りの技術は18世紀から定評のあるところであった<sup>(12)</sup>。サーラの建築職人は「トラビュキャン Trabücant」と呼ばれた壁、窓枠、玄関の専門職人であった<sup>(13)</sup>。また、セッセラ川流域のポストウワ Postua の建築職人は、セメント、石膏が専門であった<sup>(14)</sup>。建築業の技術革新が未だ不十分なこの時代にあっては、建築現場では熟練職人による手作業に負うところが大きかった。フランスやスイスにおいてピエツラの建築職人の労働力が求められたのは、その賃銀の安さもさることながら<sup>(15)</sup>、彼らが専門度の高い熟練職人であったからである。

彼らは、熟練した技術を最大限に発揮するために、しばしば小隊を組み集団で作業にあたった。郷里を出発するときに編成される小隊は、親方職人を中心に四、五人から多いときには十数人に及んだ。作業を効率的にするために、たとえば石工の隊列には必ず鍛冶職人が一人同行し、道具の手入れを担当した<sup>(16)</sup>。しかし、建築職人たちが小隊を組んだのは、作業の効率化だけが目的であったのではない。多くの場合、小隊を構成したのは家族や親族であった。その中には、親方の子弟がしばしば含ま



れていた。彼らは見習い職人として建築作業に携わり、父や兄や叔父らに囲まれた環境のもとに実践経験を積み重ねていった。彼らにとって移民は職業教育の場であり、熟練技術を修得する場であったのである<sup>(17)</sup>。

セツラ丘陵のトッラツツォ出身のアンセルミーノ家が辿った軌跡は、その点で示唆的である。1838年に生まれたジョヴァンニ・アンセルミーノ Giovanni Anselmino は、10代後半から移民を開始した。彼は一人で出発することもあったし、同郷者と行動をともにすることもあった。最初の頃に彼が向かった行き先は、国境を越えて間もないフランスのサヴォワ（時あたかもサヴォワがサヴォイア王国からフランスに割譲される前後のことである）やオートザルプであった。数年間鉄道建設に従事したのち親方となったジョヴァンニは、1880年からグルノーブルで仕事を始める。グルノーブルにはチェルヴォ渓谷出身の請負業者が多数活動しており、仕事は定期的に彼らから依頼された。彼は郷里のトッラツツォで十数人の小隊を編成し、グルノーブルとその近郊で橋、病院などの建築に従事して、徐々に熟練職人としての定評を作っていたのである。彼が編成した小隊の中には、1867年生まれの彼の長男ダヴィデ Davide も含まれていた。小隊の中で熟練技術を修得し親方となったダヴィデは、父親が築いた名声の上にグルノーブルで請負会社を設立し、父の事業をさらに拡大していくことになる<sup>(18)</sup>。

アンセルミーノ家の場合、1838年生まれのジョヴァンニが時として一人で出立することもあったのに対し、1867年生まれのダヴィデは父親が組織した小隊の中で最初の移民を体験し、技術を修得していく。この親子の経験の差は、まさしくトッラツツォが熟練建築職人地域に特化する前後の移民体験の差を物語っている。

アンセルミーノ家のケースでもう一つ示唆的なのが、ジョヴァンニがグルノーブルでチェルヴォ渓谷出身の請負業者たちから様々な恩恵を受けており、さらにその子ダヴィデが自ら請負業者として独立していることである。請負という制度は建築業では広く行われているが、その結果建築業では大企業と中小企業が相互に利益を保ちつつ並存することが可能になった。小回りの効く中小企業の存在によって、建築職人は工場労働者などに比べて、自らの伝統的な職業文化をかなり遅い段階まで維持しえたのである<sup>(19)</sup>。

しかし、移民という観点からは請負の存在はさらに別の意味を持っている。小隊を組織する親方達にとって、出発前に請負業者から送られてくる仕事の招請状と旅費分相当の準備金は、旅と移民先での労働を確保する上で欠かすことのできないものであった<sup>(20)</sup>。彼らは毎年定期的に依頼された仕事をこなすことによって請負業者との人的関係を継続していったのである。さらに、自ら請負業者として事業を展開することは、より大きな財を獲得するまたとない機会であったので、経営の才に恵まれた親方達は陸続と請負業者になっていった。いち早く建築職人地域に特化していったチェルヴォ渓谷からは、他の建築職人地域に先駆けて請負業者が生まれており、すでに18世紀前半にはアルプス地域で事業を展開していた<sup>(21)</sup>。彼らは、同郷の建築職人の技術的熟練に信頼を寄せており、在地の労働者に比して相対的に低い賃銀とあいまって、優先して同郷の親方達に仕事を分配したのである<sup>(22)</sup>。

建築職人から請負業者、事業主へと転身したもう一つの例として、ポストウワのジョワッキーノ・ノヴェット Gioacchino Novello の場合を取り上げてみよう。1843年にポストウワで生まれたジョワッキーノは、十代の頃から季節労働に出ていた。サヴォワ、イゼール諸県で働いたのち、1860年代前半にグルノーブルのフランス人経営のセメント会社で働くようになる。セメント業の草創期を代表するこの会社から職人としての才能を評価されたジョワッキーノは、1872年に同社のトゥールにおける事業の運営を委ねられる。トゥールおよびロワール川周辺で事業の拡張に成功した彼は、1900年に独立して自ら経営者になるのである。フランスでの生活が長かった彼も、結婚相手は同郷の女性であった。だが、妻と比較的早く死別し、男の子もいなかった彼は、甥のジャコモを呼び寄せて自分の後継

者とする。1869年にポストウワで生まれたジャコモは、ピエツラの近くのデザイン学校を卒業した後、パリでモザイク画を学んでおり、宗教画、宗教建築の修復に造詣が深かった。彼ら二人はセメント業と宗教建築の修復作業を中心に事業を拡大し、第一次世界大戦の前にはブルターニュ、ノルマンディーでも事業を展開するにいたる。彼らも同郷の建築職人を積極的に雇用した。彼らは、同郷の建築職人たちを彼らの事業の本拠地のトゥールに呼び寄せたのちに、仕事の状況に応じて各地に派遣したのである<sup>(23)</sup>。

ジョワッキーノの場合、彼の能力を見込んで事業を依頼したのはフランス人であった。だが、彼がトゥールで活動を開始してから、現場の作業を委ねたのはポストウワの建築職人に対してであり、彼の結婚相手は同郷の女性であり、彼が後継者として期待を寄せたのは親族のジャコモであった。このように、請負業者となり移民先での生活が長くなっても、彼らの人的関係は同郷の人々を中心に展開されているのである。

以上見てきたように、ピエツラの建築職人の移民は少なくとも19世紀後半においては、高度の専門性を持った熟練職人であり、しばしば小隊を編成して集団で作業にあたり、多くは同郷人である請負業者と密接な関係を維持していた。彼らは郷里と移民先の間的人的な紐帯の上に移民したのであり、その結果特定のコムーネからは特定の目的地に移民が集中するという、出身地と目的地の相関性が見られることになった。いわゆる移民の連鎖である<sup>(24)</sup>。たとえば、セツラ丘陵のトゥラツツォはサヴァワ、オートサヴァワ、イゼールといったフランス・アルプス地域に集中しているのに対し、同じセツラ丘陵のサーラはこうした地域に加えリヨンへの移民が数多く見られる<sup>(25)</sup>。セツセラ川流域のコッジョーラ Coggiola やグワルダボゾーネ Guardabosone の石膏職人はローザンヌやブザンソンなどジュラ山脈地域に赴くのにに対し、同じ地域のポストウワのセメント職人はトゥールに行く<sup>(26)</sup>。チェルヴォ渓谷のサン・パオロ San Paolo はサヴァワを中心としたフランス、スイスの諸地域に加え、アルジェリアに向かう移民がいたのにに対し、同じ地域のカンピーリア Campiglia からは、モンズニやシンプロンの鉄道トンネル掘削作業に従事する石工が多く出た<sup>(27)</sup>。

彼らは郷里を出発する前から、目的地、旅程、目的地での仕事の内容に知悉していた。彼らにとって移民とは生活の一部に組み込まれた行為であって、新たに生活をやり直すための「冒険」ではなかった<sup>(28)</sup>。移動することはそれ自体不安定な要素をはらんでいたが、彼らは事前に情報を収集し人的関係を利用することで、移民生活をより安全なものにしていったのである<sup>(29)</sup>。

建築職人たちの移民生活を支えていたのは、彼らの職業的紐帯であり熟練的な技術であったから、彼らは自らの職業を誇りとした。聞き取り調査の中で、ある移民経験者は次のように語っている。「私の人生は働くことにある。<sup>(30)</sup>」また、建築職人たちが撮った写真は、多くが作業中の光景や完成した建造物を背景にしたものであった。建造物の偉容を強調するような構図になっていたり、橋の建造風景の写真を葉書に貼って郷里に送り、文面に「この橋は私たちが作ったものだ」と記すなど、自らの労働の成果を誇示していることが窺える<sup>(31)</sup>。

職業に対する自覚の高さから、職業教育への情熱が生まれる。小隊による移民が年少者にとって職業教育の場になっていたことはすでに述べたが、19世紀の後半にはさらに職業訓練校の設立が志向される。ピエツラにおける職業訓練校設置は1839年に遡るが、建築職人移民の地域では、1869年にチェルヴォ渓谷のピエディカヴァッロに設立された職業訓練校が最初のものである<sup>(32)</sup>。この学校はチェルヴォ渓谷のみならずセツラ丘陵やセツセラ川流域からも、多くの建築職人の子弟を集めた。職業訓練校の導入によって、小隊の中での実践的な職業教育から、制度化された職業教育への転換がなされていったが、それは同時に専門的な技術者の養成に道を開くものであった。ポストウワ出身のジャコモ・ノヴェツラが、職業訓練校を卒業した後パリでモザイクを学び、専門技術を生かしながら経営

者として事業を拡大していく過程は、19世紀末から20世紀初頭のピエツラ移民の辿った一つの典型であると言えよう。

しかし、職業教育によって熟練職人や技術者としての専門技術を修得したり、請負業者として事業を展開することによって、移民の行き先は次第に多様かつ遠隔地化していく。今一度ノヴェツラ家を例に出すならば、ジョワッキーノはグルノーブルでセメント会社の知遇を得て、トゥールの事業所の運営を依託される。これが距離的な飛躍の第一段階である。その後、トゥールを基盤にしてブルターニュやノルマンディーへも事業を拡大する。これが第二段階である。彼は同郷のセメント職人を採用したから、ポストウワからの移民も彼の事業に歩調を合わせる形で、同じフランスの中でもアルプス地域からトゥールへ、そしてブルターニュへと移動の距離を伸長していくのである。同様に、サーラの内装職人たちも世紀転換期には、活動範囲をロワール川流域、ブルターニュ、パリへと伸ばしている<sup>(33)</sup>。

最も広範な活動を行っていたのが、いち早く熟練建築職人地域として特化したチェルヴォ渓谷であった。この地域からはすでに、19世紀半ばにフランス植民統治下で建築ブームの直中にあったアルジェリアへの移民が行われていたが、1870年代、80年代にはアメリカ合衆国やアルゼンチンへの移民も始まった<sup>(34)</sup>。たとえば、ニュー・ハンプシャー、ヴァーモント、ペンシルヴェニアなどアメリカ東海岸の諸州に、花崗岩の採掘場を求める石工たちが移民をした。さらに、20世紀の初頭には中国南部の鉄道建設にもこの地域の建築職人が従事しているのである<sup>(35)</sup>。

こうした目的地の多様化、遠隔地化は、従来の季節労働としての移民の性格を変えるものであった。一年のうちに出発して帰還するというパターンから、一年、二年移民先に滞在する生活へという、移民の長期化である<sup>(36)</sup>。この現象はチェルヴォ渓谷では1880年代に、セツラ丘陵やセツセラ川流域では世紀転換期には顕著に見られるようになった。移民が長期化することによって、移民と故郷との紐帯も微妙に変化していくことになるのである。

## (2) 郷里との紐帯

移民が季節労働的な形態をとり、一年の過半は郷里を不在にするようになった時、郷里に残ったのは女性と子供であった。建築業という労働の性格もあって、女性が男性の建築職人と行動をともにすることは希であった。また、ほかのアルプス地域で行われていた女性の季節労働的移民も、建築職人移民の地域では極めて例外的であった<sup>(37)</sup>。この地域では女性は郷里に定住して、移民が郷里との紐帯を維持する上でかなめの役割を果たすのである。

男性が春・夏の農繁期に不在なので、農作業は女性が担う労働として特化した<sup>(38)</sup>。移民の定期化に伴って、家計に占める農業収入の比率が次第に低下したとはいっても、郷里で生活する人々にとって、農耕からの収益は最低限の生活を保証する手段であった。しかし、農耕を継続し土地を維持することは、単に農業収入の獲得にとどまらない別の意味を持っていた。土地は、移民をする建築職人にとっても、郷里に残る女性にとっても、彼らが何らかの負債を負う時に唯一の担保となり得るものであった。建築職人が請負業者として事業を始める場合、彼らは郷里の土地を抵当に入れて資金を調達した。また、移民先から送金が届かない場合、郷里に残る女性たちは土地を担保に借金をして当面の生活費を工面したのである<sup>(39)</sup>。さらに、女性たちは、従来男性によって担われてきた労働、たとえばセツラ丘陵における繊維業や、チェルヴォ渓谷やセツセラ川流域における家畜の飼育などの伝統的産業を、男性に代わって担うようになった<sup>(40)</sup>。

郷里に残った女性たちの役割は、こうした経済活動だけではなかった。移動する存在である移民に

とって、郷里に定住する女性たちは、郷里やほかの移民たちの動向を知る上での情報の拠点であった。建築職人の出身コムーネには各地の移民から寄せられる職場の情報が満ち溢れていた。移民は、郷里との手紙のやり取りを通じて、いくらかでも有利な条件の職場に関する情報を入手したのである<sup>(41)</sup>。また、移民をしている時に郷里で生じた、財産の遺贈、譲渡、売却や負債の整理など様々な案件について、移民は手紙を通じて女性に指示を送った<sup>(42)</sup>。

このように、移民をする男性と郷里に定住する女性は、相互補完的に機能して移民社会を支えた。元来、移民は郷里での生活を維持、発展させることを目的としていたが、移民が定期化し自己目的化するとともに、移民を円滑に遂行するために定住する女性の存在を必要とするようになったのである。従って、移民にとって配偶者の選択は重要であった。配偶者は通常親族ないし同郷者の中から選ばれた<sup>(43)</sup>。時としては、兄弟のそれぞれの配偶者が姉妹であるということもあった。郷里に残る妻たちにとっては、その方が夫が不在の時にお互いに協力しやすいからである。移民が季節労働の形態をとっていた時は、婚約、挙式は彼らが帰郷する冬の間集中して行われた。この地域に残る「聖ピアジヨの日(2月3日)にすべての娘は涙にくれる」という諺が示すとおり、婚約、挙式は12月から2月の間に集中しており、この間の日曜日には数組の新郎・新婦が集団で挙式をすることも珍しくはなかった<sup>(44)</sup>。結婚式はまた、コムーネの人々が広範に参加することによって、不在がちな男性たちが郷里との紐帯を確認する儀礼の場でもあった<sup>(45)</sup>。

婚姻が同郷者間で執り行われ、しかも女性が郷里に定住するということは、郷里のコムーネにおける人口の再生産を保証するということでもあった。男性が定期的に冬に郷里に帰る限り、秋から冬の間には必ず出生の季節が訪れた。従って、いずれの地域においても19世紀後半の段階では、出生数は堅調であった<sup>(46)</sup>。一方、配偶者と死別した場合、男性にとっては家計を切り盛りする女性の存在が不可欠であったから、再婚率は高かった。女性が配偶者と死別した場合に再婚が極めて難しいのとは対照的であった<sup>(47)</sup>。

小土地所有の優勢なアルプス地域では、土地の過度の細分化を防ぐために、結婚率を低下させ結婚年齢を上昇させることで相続者の数を制限し、その結果として未婚の兄弟、姉妹が同居することによって、複合世帯になる傾向が高いことが指摘されている。しかし同時に、農業以外に財を獲得する機会を持っている場合(家畜の飼育など)は、結婚年齢の低下、結婚率の上昇をもたらす、世帯構造のバリエーションが増すことも指摘されている<sup>(48)</sup>。移民はまさしく農業以外に財を獲得する大きな機会であった。19世紀後半の建築職人地域の場合、結婚率については資料がないが、建築業に従事する男性の結婚年齢の低下と、移民を出している全世帯に占める単純世帯の割合の増加が指摘できる<sup>(49)</sup>。

しかし、移民の長期化はこうした郷里における家族の生活に変化を及ぼした。毎年定期的に郷里に帰るということがなくなったので、結婚式が冬に集中するという傾向は影をひそめていく。また、出生が秋から冬に集中するという傾向も徐々になくなっていく。そして、出生数そのものが顕著に減少していくのである<sup>(50)</sup>。さらに、移民の長期化が最初に現れたチェルヴォ渓谷のカンピーリアでは、早くも1880年代の後半から女性の未婚率が上昇しており、また複合世帯の割合が高くなっている<sup>(51)</sup>。女性の未婚率の上昇は、移民が次第に配偶者として同郷以外の女性を選択し始めていることを示唆している。また複合世帯の増加は、男性の不在が恒常化するのに対して、親族の女性たちが同居して協力しあっている状況を想定できる。

こうして移民が長期化することによって移民と郷里との紐帯は徐々に弛緩していく。長期間移民先に滞在する移民の中から、移民先に定住する道を選択する人も現れるようになる。最初に移民先への定住を選択したのは請負業者たちであった。彼らは事業を展開する上での法的な権利を獲得するために、定住、さらに帰化する道を選択することになる<sup>(52)</sup>。とりわけフランスで事業を展開していた請

負業者にとって、1880年代、90年代における仏伊の外交関係の悪化とフランス人労働者のイタリア人労働者排斥の動きの中では、事業を円滑に進めるためにフランス国籍取得は必要なことであった<sup>(53)</sup>。

しかし、移民の移民先への定住化を決定的に促進したのは、第一次世界大戦の勃発と戦間期における移民先の諸国とイタリアの双方における移民政策の変更であった。第一次大戦はとくに徴兵年齢にある移民に帰郷するかどうかの決断を迫った。さらに、フランス、スイス、アメリカ合衆国における移民制限的な諸政策およびファシズム政権のもとでのイタリアの移民流出制限政策への転換は、移民に移民先での定住と帰郷の二者択一を迫った<sup>(54)</sup>。すでに生活の基盤の大部分を移民先に移して独立した生計を立てることのできる人々にとって、移民先への定住は不可避であった。彼らは家族を移民先に呼び寄せ、次第に帰化していく<sup>(55)</sup>。一方、帰郷を決断した人々も、山間地域には戻らずピエツァ市周辺の平野部での生活を選択するようになる<sup>(56)</sup>。こうして、20世紀初頭に始まった建築職人地域の人口減少の傾向は、戦間期になっても止まず、むしろ一層促進されていくのである。

以上見てきたように、この地域の移民は家計の不足分を補うことを目的として始まったが、その経験を通じて建築職人たちは専門技術を体得し熟練化していった。彼らにとって、移民とは自らの技能を発揮する場であった。郷里に残った女性たちもそうした移民の生活を支える役割を果たした。確かに移民の長期化は次第に移民と郷里との紐帯を弱め、第一次大戦後の過疎化をもたらしたが、少なくともそれまでは、移民はこの地域の経済的発展と固有な文化の形成をもたらしたのである。

註：(1)A.Lonni, Edili, boscarini e tessitori nell'emigrazione dalla val Sessera, in L'emigrazione biellese fra Ottocento e Novecento, p.265.

(2)トリヴェーロでは、1792年に一世帯を維持するのに5ジョルナータ（1ジョルナータは約38ないし39アール）の土地が必要とされていたのに対し、一世帯平均の所有地は約3.2ジョルナータであった。Ibid., p.265. なお、農村における小土地所有の優勢が移民（ないし出稼ぎ）をもたらしたことを指摘した研究として、喜安朗「マルタン・ナドの世界——近代における個の自立と共同性」（二宮宏之編『民族の世界史9 深層のヨーロッパ』山川出版社、1990年）が参考になる。

(3)S.Olmo, Emigrazione e comunità in Val Cervo nella prima metà del Settecento, Bollettino storico bibliografico subalpino, 75-1, 1977, pp.241-243.

(4)P.Audenino, Un mestiere per partire, pp.42-45.

(5)G.Sirchia, Mestieri, cultura del lavoro, itinerari degli edili biellesei fra Ottocento e Novecento, in Identità e integrazione, pp.200-202, G.Levi, Mobilità della popolazione e immigrazione a Torino nella prima metà del Settecento, Quaderni storici, 17, 1971, pp.538-539.

(6)P.Corti, Paesi d'emigranti, pp.39-40, p.50.

(7)A.Lonni, I postuesi in Francia, in L'emigrazione biellese nel Novecento, p.54.

(8)Id., Edili, boscarini e tessitori, p.274.

(9)G.Sirchia, op.cit., p.179-181.

(10)P.Audenino, op.cit., p.49. P.Corti, op.cit., p.43. (11)Ibid., pp.45-46. 56-57.

(12)P.Audenino, op.cit., p.45.

(13)P.Corti, op.cit., p.105.

(14)A.Lonni, Edili, boscarini e tessitori, pp.275-280.

(15)19世紀後半におけるピエモンテ建築職人の給与については、A.Geisser/E.Magrini, Contribuzione alla storia e statistica dei salari industriali in Italia nella seconda metà del secolo XIX, La Riforma sociale, 14-10/11, 1904, p.785, pp.881-889. 移民先におけるイタリア人建築職人と現地の建築職人の給与の比較については、P.Milza, Français et italiens à la fin du XIX siècle, Roma, 1981, p.262. 及び B.Hansen, Wage Differentials in Italy and Egypt. The

- Incentive to Migrate before World War I., The Journal of European Economic History, 14-2, 1985, pp.349-353 を参照。
- (16)P.Audenino, op.cit.,p.115.
- (17)P.Corti, op.cit.,pp.106-107. A.Lonni, op.cit.,p.279. G.Rosoli, I percorsi dell'integrazione, in Identità e integrazione, p.18.
- (18)P.Corti, op.cit.,pp.94-98, 175-177. (19)G.Sirchia, op.cit., pp.203-204.
- (20)P.Corti, op.cit.,pp.92-93. (21)P.Audenino, op.cit., pp.45-46.
- (22)F.Ramella, Il Biellese nella "grande emigrazione" di fine Ottocento. in L'emigrazione biellese fra Ottocento e Novecento, pp.340-342.
- (23)A.Lonni, I postuesi in Francia, pp.57-59.
- (24)移民連鎖については、第一節註(8)を参照。(25)P.Corti, op.cit., pp.112-113, p.118.
- (26)A.Lonni, Edili, boscarini e tessitori, p.278. Id.,I postuesi in Fracia, p.65.
- (27)P.Audenino, op.cit., pp.102-104. (28)P.Corti, op.cit., pp.120-121.
- (29)F.Ramella, op.cit., pp.343-344.
- (30)D.Albera, L'immagine dell'emigrazione biellese, in Identità e integrazione,p.297.
- (31)Ibid., p.303. AA.VV., Sapere la strada, pp:122-138.
- (32)P.Audenino, op.cit., pp.64-68. (33)P.Corti, op.cit., pp.117-118.
- (34)チェルヴォ溪谷からアメリカ合衆国への初期の移民については、P.Audenino, op.cit., pp.115-116. アルゼンチンへの初期の移民については、M.R.Ostuni, Biellesi in AmericaLatina, in L'emigrazione biellese nel Novecento. pp.198-203.
- (35)P.Audenino, op.cit., pp.108-109, 117-121.
- (36)Ibid., p.111. A.Lonni, I postuesi in Francia, p.56.
- (37)P.Corti/A.Lonni, L'emigrazione temporanea in una vallata alpina dell'800.p.88. P.Corti, op.cit., pp.68-69.
- (38)A.Lonni, I postuesi in Francia, p.50.
- (39)P.Audenino, Le custodi della montagna :donne e migrazioni stagionali in una comunità alpina, Annali dell'Istituto "Alcide Cervi",12,1990, p.272. Id., Un mestiere per partire, pp.186-187.
- (40)Id., Le custodi della montagna,p.270, P.Corti, Paesi d'emigranti, pp.69-70. A.Lonni, op.cit., p.51. また、本稿表10参照。
- (41)F.Ramella, op.cit., p.338.
- (42)P.Audenino, Un mestiere per partire, pp.155-156.
- (43)Ibid., pp.208-209. A.Lonni, I percorsi dell'integrazione dal Piemonte alla Francia:le scelte coniugali, Annali dell'Istituto 'Alcide Cervi', 12, 1990, pp.297-298.
- (44)P.Audenino, Le custodi della montagna, p.274. P.Corti, Paesi d'emigranti, pp.74-76. A.Lonni, op.cit., p.292.
- (45)P.Corti, op.cit., p.77.
- (46)P.Corti, op.cit., pp.75.p.212. A.Lonni, Edili, boscarini e tessitori, p.257.
- (47)P.Audenino, Un mestiere per partire, p.189-191.
- (48)P.P.Viazzo/D.Albera, The Peasant Family in Northern Italy, 1750-1930 :A Reassessment, Journal of Family History, 15-4, pp.466-470.

- (49)たとえば、セッラ丘陵のサーラ、トッラツツオの場合、建築業者の平均結婚年齢はほかの業種に従事している男性に比べ一才前後低い。P.Corti, op.cit., pp.63,66-67, A.Lonni, op.cit., p.251. Id., I postuesi in Francia, pp.74-75.
- (50)トッラツツオでは1890年前後から、サーラとセッセラ川流域のポストウワでは1900年以降、目立って出生数が減少している。Ibid., p.64. P.Corti, op.cit., p.212.
- (51)P.Audenino, Le custodi della montagna, pp.277-279. 移民の長期化、恒常化と複合世帯の増加の関係を指摘した研究として、C.B.Brettell, Emigration and Household Structure in a Portuguese Parish, 1850-1920. Journal of Family History, 13-1, 1988. が有益である。
- (52)F.Ramella, op.cit., p.341.
- (53)1880年代、90年代の仏伊関係、フランスの労働者のイタリア人労働者排斥の動きについては、P. Milza, op.cit., 特に ch.1, ch.3 を参照。
- (54)P.Corti, op.cit., pp.167-169.
- (55)P.Audenino, Un mestiere per partire, p.243.
- (56)Ibid., p.249. A.Lonni, Edili, boscarini e tessitori, p.287.

#### 4. 繊維業と移民

地域3（ストローナ川流域）や地域4（セッセラ川流域）の一部では、伝統的に毛織物を中心とする繊維業が展開していた。建築職人地域と同様に、小土地所有が優勢なこの地域では、繊維業は土地からの農業収入では維持できない家計を補助することが元来の目的であった。

18世紀後半の段階では、この地域の毛織物業はほぼ全工程が家内制手工業によって担われていた。毛織物業者は、もっぱら商人資本家から提供された原材料を紡績、織布して商人資本家に引き渡した。商人資本家は自ら所有する工場で縮絨、染色などの最終的工程を施したのちに、それをローカルな市場圏に向けて販売したのである<sup>(1)</sup>。この地域に機械が導入され、本格的な工場制が始められたのは1830年代のことであった。機械はまず紡績部門において導入され、紡績に従事する労働者が工場に集中するようになった。40年代後半には、未だ職人の熟練的な労働に依っていた織物部門も、職人が工場で作業をするようになる<sup>(2)</sup>。

織物職人が工場で作業をするようになって、彼らが土地の維持、耕作を放棄することはなかった。数年に一度繰り返しおこる農業危機は、農産物価格を上昇させ、同時にローカルな市場圏を対象とする毛織物の需要を低下させた。彼らは農業危機にともなう生活費の増大と収入の減少に対抗するため、最低限の自家消費分の食糧を生産する必要があったのである<sup>(3)</sup>。

しかし、彼らが土地を維持した理由はそれだけではない。織物職人は工場労働のかたわら、家庭内での織物製造を継続していた。彼らはすでに18世紀から、縮絨など最終的な加工の工程を経ていない低質の織物を近隣の市場に向けて自ら販売していたが、それをこの段階でも維持したのである。こうして得られた収入は、出来高払いで不安定な工場からの給与を補填しうる手段となったのである。紡績部門の機械化によって毛糸が大量に製造されるようになったことで、毛糸の入手は容易であった。しかし、毛糸を購入するためには資金が必要であった。土地はこの資金捻出のための担保となったのである<sup>(4)</sup>。

土地はこのように、依然として彼らの生活に不可欠であったので、土地を細分化せずに維持していくことが求められた。そこで相続人の数を限定するために、土地の相続人を男子に限定し、しかも分

割相続にならないように男子の結婚数を制限したのである。そこで、郷里に残っているのは結婚できる見込みのない男子の中から、移民をする者が現れるのである<sup>(6)</sup>。また、土地の相続は男子に限定されていたが、女子にも相続権は認められていた。女子の場合、相続は婚姻の際の嫁資という形で、金銭や物品で決済されるのが一般的であった。だが、婚姻ないしは父親の死去の際に嫁資が払えない場合、男子相続人はしばしば出稼ぎ労働に従事することによって資金を作った<sup>(6)</sup>。19世紀半ばまでこの地域で行われてきた移民は、以上のようなケースであった。

1854年に最大の農業危機を迎えたこの地域はそれを切り抜けると、60年代、70年代には市場の拡大とともに、毛織物生産が飛躍的に上昇する。生産の増大は雇用の拡大と賃銀の上昇に結びついた。家計に占める農業収入の比率はますます低下し、土地の細分化が徐々に進行する。しかし、それでも農作業は女性の労働によって維持されていく。かつて家内工業華やかなりし頃は、女性は紡績部門を担っていたが、紡績部門の工場制、機械化によって、男性の労働者にとって替わられた。その後雇用の拡大によって、結婚前の女性や寡婦は工場で働くようになってが、結婚した女性は夫の家内工業の手伝いと農作業に専従するようになるのである<sup>(7)</sup>。

もともと、土地が維持されたとはいってもそれが持つ意味は変わってきた。この時期は、品質管理の徹底、労働時間の厳守、雇用の増大に伴う地域外の労働者の導入など、企業家が従来の労働慣行に反する規律を織物職人に課してきていた。織物職人たちはこうした企業家の動きに対してストライキで応じた。ストライキで収入が途絶えたとき、農耕による収入と土地を担保にしての借金が彼らの生活手段であった。すなわち、土地は彼らの自律性を維持し企業家に抵抗する手段として機能したのである<sup>(8)</sup>。

だが、1870年代末に織機が導入されることによって状況は一変する。当初織物職人たちはストライキでこれに抵抗したが、企業家が警察権力の介入を要請した結果、多くの織物職人の逮捕者を出してストライキは終結した。今や織物職人に残された道は、機械を相手に工場労働をするか、それを拒否して家庭で職人的な労働を続けるかであった。しかし、機械の導入で織物部門の賃銀は相対的に低下しており、また織物部門にも女性や児童が雇用されるようになっていたので、前者は収入の減少をもたらしたばかりでなく、熟練職人あるいは家長としての社会的地位の低下を意味した。後者は、それを試みる者もいたけれども、生計を維持するだけの収入を上げることはできなかった<sup>(9)</sup>。

どちらにも進むことのできない織物職人たちが選択したもう一つの道が移民であった。彼らは家族を同動し繊維業が行われている地域を目指して、リヨンをはじめとするフランスの各地や、アメリカ合衆国やアルゼンチンなどに渡って行った<sup>(10)</sup>。彼らが多く集まった地域の一つに、アメリカ合衆国ニュー・ジャージー州の絹織物の町パターソン Paterson がある。彼らはそこで織物部門に従事する。すでにここでも織機は導入されていたが、絹織物には熟練労働が必要とされる工程が残っていた。また、賃銀もピエツラに比べて約二倍であった上に、男女間の賃銀水準に開きのあったピエツラに対し、パターソンでは賃銀格差があまりなかった。さらに、彼らの間にはアメリカは政治的自由の地であるという認識が広く普及していた。彼らはピエツラの毛織物工場での闘争の経験をもとに、パターソンでも労働運動を積極的に推進する。彼らにとってイデオロギーは重要な要素ではなかったが、それでも彼らは主としてアナキズム系の組織との連帯を深めていった<sup>(11)</sup>。

彼らは郷里を出立するときに土地を売却し、永住する意志をもって旅立ったが、郷里との紐帯は容易には断ち切れなかった。彼らは後から来る移民のために、情報を提供したり物的、精神的な援助をすることを惜しまなかった。彼らの郷里との紐帯を最も端的に表現しているのは、1897-8年に起こったピエツラ毛織物業地域一帯の大労働争議の際に、彼らが郷里の労働者を支援して送った寄付金である<sup>(12)</sup>。



バターソンへの移民は1890年代にピークを迎え、その後次第に減少していく。それはバターソンにおけるストライキの失敗やアナーキストに対する攻撃、一時的な雇用の危機など、この地域に対して従来抱かれていた「自由と機会の地」というイメージの失墜によるところが大きい<sup>(13)</sup>。しかし、バターソンへの移民は減少しても、毛織物業の草創期にあったアルゼンチンなどへの移民は継続されている。アルゼンチンでは1930年代に30を数えた毛織物会社のうち、6つはピエツラ移民によって経営されていたのである<sup>(14)</sup>。

以上見てきたように、19世紀後半から20世紀初頭にかけての繊維業者、とりわけ毛織物職人の移民は、織物部門への機械の導入という産業構造の転換によってもたらされたものであった。しかし彼らが移民という道を選択したのは、決して産業構造の転換によって雇用の機会を奪われたからではなく、むしろ彼らが伝統的に維持してきた熟練的な技能や社会的紐帯を継続するためだったのである<sup>(15)</sup>。

註：(1)F.Ramella, Famiglia, terra e salario in una comunità tessile dell'Ottocento. Movimento operaio e socialista, 23-1, 1977, pp.7-8.

(2)Ibid., p.9. 19世紀のピエツラにおける毛織物工業の発展については、G.Quazza, L'industria laniera e cotoniera in Piemonte dal 1831 al 1961, Torino, 1961. 及び V.Castronovo, L'industria laniera in Piemonte nel secolo XIX, Torino, 1964. を参照。

(3)F.Ramella, Terra e telai, Torino, 1984, pp.66-68.

(4)Ibid., pp.126-130.

(5)Ibid., pp.76-77. Id., Famiglia, terra e salario, p.15.

(6)Id. Terra e telai, pp.74-75. 相続と婚姻の際の嫁資の関連については、P.Bourdieu, Les stratégies matrimoniales dans le système de reproduction, Annales E.S.C., 27-4/5, 1972. が参考になる。

(7)F.Ramella, op.cit., p.153-154. Id., Famiglia, terra e salario, pp.22-23. 25-27.

(8)Ibid., pp.31-32

(9)Id., Terra e telai, pp.252-267.

(10)出身地と行き先の関係については断片的な情報しかないが、たとえばストローナ川流域のトリヴェーロでは、20世紀初頭の14年間に織物職人移民のそれぞれ三分の一ずつがフランス、アメリカ合衆国、アルゼンチンに向かっている。ただし、フランスが行き先になっている場合でも、マルセイユやボルドーなどの港からアメリカ大陸に向かった人々が多くいると考えられる。A.Lonni, Edili, boscarini e tessitori, p.286. M.Neiretti, L'emigrazione biellese e quella di altre regioni alpine, in L'emigrazione biellese fra Ottocento e Novecento, p.482.

(11)F.Ramella, Across the Ocean or over the Border: Expectations and Experiences of Italians from Piedmont in New Jersey and Southern France. in printing.

(12)C.Ottaviano, op.cit., p.434.

(13)F.Ramella, op.cit.

(14)M.R.Ostuni, op.cit., p.217.

(15)V.Castronovo, Lavoro ed emigrazione nella storia della comunità biellese, in L'emigrazione biellese fra Ottocento e Novecento, p. 67.

## 5. 結びにかえて

前章まで、ピエツラから移民した建築業と繊維業に携わる人々の場合を通じて、移民のメカニズム

を検討してきた。以上の検討から導き出されることとして、第一に、ピエツラ移民は建築業と繊維業のいずれにおいても職業的な熟練に支えられた集団であった<sup>(1)</sup>。移民にとって職業とは、単なる糊口をしのぐ手段ではなく、移民先と郷里とを媒介する手段として、また親から子供への教育の場として、いわば文化的な媒体の機能を果たしていたのである<sup>(2)</sup>。

指摘すべき第二の点は、職業と並んで、家族、親族、地縁が移民に果たした役割の大きさである。19世紀半ばの林業の衰退や農業危機、19世紀後半の自動織機の導入など、ピエツラの人々は絶えず大きな社会的変化の中で危機に晒されていた。しかし、彼らは地縁、親族、そしてなかならず家族を基盤にして、所与の条件のもとで何ができうるかを推し量り選択して行動した。移民とはまさにその選択の結果に他ならない。その意味で、移民は家族の「戦略」の中に位置づけて論じられなければならないのである<sup>(3)</sup>。

職業的な熟練に支えられ、家族の戦略によって危機に対処していったピエツラ移民は、移民という現象に対してしばしば認識されるような、過剰人口や貧困の結果析出されたデラシネ的な存在ではなかった。彼らの土地は確かに貧困であったが、それは彼ら自身の貧困を意味するものでは決してなかった<sup>(4)</sup>。むしろ、移民という行為は、貧困な彼らの土地を有効に活用するための方途であり、地域社会が発展していく上で重要な構成要素の一つであった<sup>(5)</sup>。「自律的な移民」、これはピエツラ移民の共同研究が到達した最も重要な結論であろう。

この結論は移民研究に豊かな成果をもたらすことに疑いはないが、問題がないわけではない。たとえば、従来受け身で従属的な存在ととらえられていたフランスやアメリカへの移民が、独自の論理をもった「自律的な」存在として認識されるということは、アルジェリアや南アフリカなど植民地へ赴いた移民も、単なる「植民地主義の犠牲者」ではなくなるということでもある。移民自身が植民地および植民地主義とどのように「主体的」に関わったかという問題が、新たな課題として出てくるであろう。実際、自らの労働の成果を誇示する写真を残した移民たちが、植民地では管理者、監督者としての相貌を呈した写真を残したという事実が<sup>(6)</sup>、この問題の重要性を示しているように思われる。

だが、それ以上に大きな問題は、「自律的な移民」という像がイタリア移民全体に対する認識をくつがえすものなのか、それともピエツラという極めて限られた地域に限定される例外的なものなのか、という点にある。ピエモンテやロンバルディアの他のアルプス地域の移民に関する近年の研究は、ピエツラ移民とほぼ類似した結論を導き出している<sup>(7)</sup>。一方、同じアルプス地域でも、ヴェーネトの移民の場合は、斡旋業者による仲介が顕著であり、ピエツラ移民のような自律性は見られない<sup>(8)</sup>。また、ピエツラからも20世紀の前半には平野部から農業危機を背景にした農業労働者が大量に移民するが、彼らは未熟練の建築労働者として熟練労働者より低い賃銀体系、社会的階梯の中に組み込まれるのである<sup>(9)</sup>。彼らを熟練職人の移民と同列に論じることができるのであろうか。

しかし、ピエツラの熟練職人移民の極北に位置するのが、南部諸州からの移民である。未熟練労働者の多さに加え、識字率の著しい低さのゆえに、南部からの移民は大量移民の時代から現在にいたるまで、ピエツラを代表とする北部移民とは絶えず対置されて論じられてきた。たとえば、同じ小土地所有を維持するための移民であった南部農民の移民の場合、ピエツラのように地域発展に貢献しなかったばかりか、むしろ土地を投機の対象とする傾向を助長し、農業の近代化を遅らせたという点で、地域発展を阻害したとすら評価されているのである<sup>(10)</sup>。

こうした地域ないし職業集団による差異がなぜ生じたかを考察するためには、地域間、職業集団間の比較研究が行われていく必要があるだろう。もっとも、イタリアの地域間格差、とりわけ南部問題は、イタリアにとって古くて新しい問題であり、移民に限らず地域間の比較研究はすでに数多く行われていると言ってよい。だが、ピエツラ移民研究の成果は、比較研究を行う際に、従来行われてきた

ような農業構造や政治過程の分析だけでは不十分であることを示唆している。そうした全体構造の分析に加え、所与の条件のもとで家族、親族あるいは地域社会がどのような選択を行ったかを考察することが不可欠の視座として要請されているのである<sup>(11)</sup>。

筆者は序章で、移民研究におけるマクロな分析を前提としたミクロな分析が重要であると記した。だが、ピエツラ移民の研究成果を通覧してみると、ミクロな視点による研究の「戦略」上の重要性は一層明瞭になったように思われるのである。

註：(1)この評価自体は新しいものではなく、L.エイナウディ Luigi Einaudi や、F.コレッティ Francesco Coletti といった同時代人によってすでに指摘されている。だが、彼らがピエツラないしピエモンテ移民に対して下した肯定的評価は、イタリア移民に対する政策提言のためになされたものであり、移民と職業の内在的メカニズムに分け入るものではなかった。L.Einaudi, L'emigrazione temporanea in Italia, La Nuova Antologia, 1900, 1 agosto, pp.537-539. F.Coletti, Dell'emigrazione italiana, Milano, 1912, p.197.

(2)G.Rosoli, op.cit., pp.18-19.

(3)家族の「戦略」をめぐる議論については、P.Bourdieu, op.cit. を参照。先にあげた喜安朗氏の論文では、「共同性」と「個の志向性」という二つの項を軸に議論は展開されているが、この二項を媒介するものとしての家族ないし親族の持つ重要性がより強調されるべきであるように筆者には思われる。喜安前掲論文、283-292頁。

(4)P.P.Viazso, Upland Communities, pp.295.

(5)V.Castronovo, op.cit., p.70.

(6)D.Albera, L'immagine dell'emigrazione biellese, p.307. C.Ottaviano, Fortune, travagli e privilegi dei biellesi in Sudafrica, in L'emigrazione biellese nel Novecento, pp.275-276.

(7)M.Neiretti, op.cit., pp.489-497. 及び第一節註(20)参照。

(8)ヴェーネト山間部からの移民についてはA.Lazzarini, L'emigrazione temporanea dalla montagna veneta nel secondo Ottocento, Ricerche di storia sociale e religiosa, 9,1976, ヴェーネトにおける斡旋業者の活動については P.Brunello, Agenti di emigrazione, contadini e immagini dell'America nella provincia di Venezia. Rivista di storia contemporanea, 11-1, 1982.

(9)F.Ramella, Il Biellese nella "grande emigrazione", pp.346-347.

(10)E.Sori, op.cit., pp.159-164, F.Cerese, Economia precaria ed emigrazione(1860-1910), Studi emigrazione, 37,1975. pp.76-81.

(11)こうした研究の方向を提唱したものとして、F.Ramella, Il caso biellese e gli studi sull'emigrazione italiana, in Studi sull'emigrazione. Un'analisi comparata. Milano, 1991.

(きたむら あけお・東京大学文学部・イタリア近現代史)

Il mio ringraziamento va ai seguenti studiosi italiani che mi hanno accolto con simpatia a Torino e a Biella e che hanno reso possibile questo mio piccolo saggio : Dionigi Albera, Patrizia Audenino, Paola Corti, Chiara Ottaviano, Mariella Pautasso, Franco Ramella.

表1 ビエツラ郡、ピエモンテ州、イタリアの人口動態

	ITALIA	PIEMONTE	BIELLA
1861	26,328,000	2,758,550	134,486
1871	28,151,000	2,928,160	146,442
1881	29,791,000	3,089,928	161,972
1901	33,778,000	3,319,025	174,332
1911	36,921,000	3,413,837	171,963
1921	37,856,000	3,439,050	169,077
1931	41,043,000	3,457,731	173,719
1936	42,399,000	3,418,300	174,749
1951	47,516,000	3,518,177	189,774
1961	50,624,000	3,914,250	207,331
1971	54,137,000	4,432,313	211,027

出典：表1、表2ともに

ISTAT, Popolazione residente e presente dei Comuni. Censimenti dal 1861 al 1971.

tomo.1, Circostrizioni territoriali  
al 24 ottobre 1971, Roma, 1977.

pp.2-3, 76-83 より作成。

表2 ビエツラ郡における人口動態

	地域1	地域2	地域3	地域4	地域5	地域6	地域7	地域8	地域9	合計
1861	15,408	10,200	18,684	10,254	10,726	15,853	22,162	11,745	19,454	134,486
1871	16,286	11,024	20,349	10,899	11,372	17,060	26,262	12,485	20,705	146,442
1881	18,864	11,198	22,400	12,196	11,927	18,071	30,950	13,671	22,695	161,972
1901	19,574	10,528	23,521	12,411	12,222	18,166	37,153	15,486	25,261	174,332
1911	19,190	8,720	23,304	12,669	11,691	16,643	39,849	15,262	24,635	171,963
1921	18,119	7,739	22,139	12,814	10,618	15,528	44,214	14,517	23,389	169,077
1931	19,232	6,158	24,915	13,922	8,496	15,134	50,797	11,564	23,501	173,719
1936	17,280	5,908	26,909	14,203	7,290	14,765	53,286	11,766	23,342	174,749
1951	17,949	7,157	29,276	15,096	6,449	16,261	60,242	11,566	25,778	189,774
1961	17,246	7,049	30,420	14,912	5,831	17,682	72,780	12,079	29,332	207,331
1971	16,120	6,127	27,468	13,183	5,072	18,047	81,648	11,340	32,022	211,027

地域1 (Valle Cervo)

地域2 (Tra Cervo e Strona)

地域3 (Valle Strona)

地域4 (Val Sessera)

地域5 (Serra)

地域6 (Valle Elvo)

地域7 (Biella e dintorni)

地域8 (Brusnengo e dintorni)

地域9 (pianura)

表3 ビエツラ郡、ピエモンテ州、イタリアの移民数

年	ITALIA	PIEMONTE	BIELLA	年	ITALIA	PIEMONTE	BIELLA
1876	108,771	31,682		1901	533,245	42,385	4,961
1877	99,218	24,307		1902	531,509	41,122	4,948
1878	96,268	24,775		1904	507,976	43,735	3,815
1879	119,831	27,545		1904	471,191	52,838	4,843
1880	119,831	29,400		1905	726,331	68,396	6,054
1881	135,832	34,418		1906	787,977	72,190	5,135
1882	161,562	38,006		1907	704,675	63,244	5,277
1883	169,101	29,419		1908	486,674	55,474	4,252
1884	147,017	28,996	665	1909	625,637	56,306	4,366
1885	157,193	28,705	536	1910	651,475	60,599	4,089
1886	167,829	27,554	500	1911	533,844	52,335	4,522
1887	215,665	28,461	557	1912	711,446	65,244	5,130
1888	290,736	30,603	448	1913	872,598	78,663	5,331
1889	218,412	34,734	640	1914	479,152	51,826	4,939
1890	215,854	30,497	454	1915	146,019	26,731	2,257
1891	293,631	27,122	668	1916	142,364	26,094	
1892	223,667	33,863	864	1917	46,496	12,977	
1893	246,751	35,521	1,048	1918	28,311	9,210	
1894	225,323	30,482	522	1919	253,224	45,448	
1895	293,181	25,826	733	1920	614,611	60,539	
1896	307,482	22,599	1,017	1921	201,291	30,391	
1897	299,855	18,576	962	1922	281,270	46,749	
1898	283,715	21,743	593	1923	389,957	56,864	
1899	308,339	20,911	817	1924	364,614	47,963	
1900	352,782	23,322	1,762	1925	280,081	34,445	

出典：Commissariato generale dell'emigrazione, Annuario statistico dell'emigrazione italiana, Roma, 1926. 及び Ministero dell'Agricoltura, Industria e Commercio, Direzione generale dell'emigrazione, Statistiche dell'emigrazione italiana all'estero(1881-1915). より作成。

表4 ビエツラ郡における地域別移民数（5年毎）

	地域1	地域2	地域3	地域4	地域5	地域6	地域7	地域8	地域9	その他	合計
1884-85	129	210	172	175	334	12	36	85	24	415	1,201
1886-90	476	99	151	189	644	59	208	302	56	657	2,599
1891-95	1,001	225	557	66	140	124	637	318	110	7	3,835
1896-1900	766	186	640	339	355	526	875	484	245	35	5,151
1901-05	2,805	1,945	2,849	2,303	2,119	2,510	3,728	3,572	2,572	218	24,621
1906-10	2,519	1,768	2,657	1,937	2,181	2,055	3,616	3,174	3,212	0	23,119
1911-15	2,057	1,711	2,200	1,923	2,329	2,109	3,800	2,857	3,193	0	22,179

出典：表3に同じ。（註）移民統計で、コムーネ毎の表示があるのは1884年から1915年までだが、そのうち1884年から1903年までは全てのコムーネの記載はなく、一部のコムーネは「残り」として一括して記載されている。この表では「その他」としてまとめてある。

表5 ピエツラ郡における一時移民と永住移民

年	一時	永住	年	一時	永住	年	一時	永住
1884	603	62	1890	366	88	1896	430	587
1885	427	109	1891	207	461	1897	341	621
1886	444	56	1892	0	864	1898	132	461
1887	487	70	1893	0	1,048	1899	817	0
1888	384	64	1894	200	322	1900	1,762	0
1889	620	20	1895	286	447	1901	4,680	281

出典：表3に同じ。

表6 ピエモンテにおける移民の行き先

年	ヨーロッパ、地中海地域				アメリカ、オセアニアなど				総計
	フランス	スイス	その他	合計	USA	7州	その他	合計	
1876-80	95,487	24,247	5,529	125,263	893	6,617	4,945	12,455	137,718
(%)	(69.3)	(17.6)	(4.0)	(91.0)	(0.7)	(4.8)	(3.6)	(9.0)	(100.0)
1881-85	104,364	10,247	4,450	119,061	2,534	33,275	4,674	40,483	159,544
(%)	(65.4)	(6.4)	(2.8)	(74.6)	(1.6)	(20.9)	(2.9)	(25.4)	(100.0)
1886-90	75,817	5,971	3,514	85,302	5,056	53,124	8,367	66,547	151,849
(%)	(49.9)	(3.9)	(2.3)	(56.2)	(3.3)	(35.0)	(5.5)	(43.8)	(100.0)
1891-95	75,802	9,049	5,898	90,749	6,006	39,348	16,711	62,065	152,814
(%)	(49.6)	(5.9)	(3.9)	(59.4)	(3.9)	(25.8)	(10.9)	(40.6)	(100.0)
1896-00	37,984	16,189	7,889	62,062	4,296	32,764	8,029	45,089	107,151
(%)	(35.5)	(15.1)	(7.4)	(57.9)	(4.0)	(30.6)	(7.5)	(42.1)	(100.0)
1901-05	79,167	48,866	22,627	150,660	35,669	48,408	13,739	97,816	248,476
(%)	(31.9)	(19.7)	(9.1)	(60.6)	(14.4)	(19.5)	(5.5)	(39.4)	(100.0)
1906-10	88,802	65,636	20,207	174,645	52,697	67,875	12,596	133,168	307,813
(%)	(28.9)	(21.3)	(6.6)	(56.7)	(17.1)	(22.1)	(4.1)	(43.3)	(100.0)
1911-15	101,898	57,261	18,907	178,066	43,508	24,881	28,344	96,733	274,799
(%)	(37.1)	(20.8)	(6.9)	(64.8)	(15.8)	(9.1)	(10.3)	(35.2)	(100.0)
1916-20	111,129	18,683	3,875	133,687	12,542	6,439	1,600	20,581	154,268
(%)	(72.0)	(12.1)	(2.5)	(86.7)	(8.1)	(4.2)	(1.0)	(13.3)	(100.0)
1921-25	149,613	8,192	5,587	163,392	7,597	38,815	6,608	53,020	216,412
(%)	(69.1)	(3.8)	(2.6)	(75.5)	(3.5)	(17.9)	(3.1)	(24.5)	(100.0)

出典：Annuario statistico dell'emigrazione italiana, p.46, pp.91-93 より作成。

表7 ピエモンテ移民の性別、単身、年齢、職業による構成

年	男性	女性	単身	15才>	職業 (15才以上の男女)				
					a	b	c	d	その他
1876-80 (%)	119,511 (86.8)	18,207 (13.2)	118,890 (86.3)	130,479 (94.7)	57,788 (44.3)	8,412 (6.5)	27,876 (21.4)	25,662 (19.7)	10,741 (8.2)
1881-85 (%)	131,297 (82.3)	28,247 (17.3)	115,948 (72.7)	145,368 (91.1)	79,127 (54.4)	16,447 (11.3)	29,594 (20.4)	9,813 (6.8)	10,389 (7.2)
1886-90 (%)	118,147 (77.8)	33,702 (22.2)	100,753 (66.4)	134,302 (88.4)	72,780 (54.2)	15,048 (11.2)	23,720 (17.8)	11,107 (8.3)	11,647 (8.7)
1891-95 (%)	114,130 (74.7)	38,684 (25.3)	102,765 (67.3)	134,418 (78.0)	69,077 (51.4)	16,586 (12.3)	25,316 (18.8)	8,666 (6.5)	14,773 (11.0)
1896-00 (%)	85,599 (79.9)	21,552 (20.1)	81,435 (76.0)	97,420 (90.9)	51,808 (53.2)	13,645 (14.0)	16,478 (19.9)	7,510 (7.7)	7,979 (8.2)
1901-05 (%)	205,438 (82.7)	43,038 (17.3)	201,731 (81.2)	225,660 (90.8)	96,389 (42.7)	33,306 (14.8)	38,388 (17.0)	28,723 (12.7)	28,854 (12.8)
1906-10 (%)	245,926 (79.9)	61,887 (20.1)	252,959 (82.2)	279,214 (90.7)	96,891 (34.7)	35,702 (12.8)	50,183 (18.0)	45,942 (16.5)	50,496 (18.1)
1911-15 (%)	219,505 (79.9)	55,294 (20.1)	219,013 (79.7)	248,276 (90.4)	69,808 (28.1)	42,838 (17.3)	36,612 (14.8)	50,810 (20.5)	48,208 (19.4)
1916-20 (%)	95,212 (61.7)	59,056 (38.3)	129,963 (84.2)	140,825 (91.3)	25,662 (18.2)	22,232 (15.8)	11,912 (8.5)	32,409 (23.0)	48,610 (34.5)
1921-25 (%)	144,624 (66.8)	71,788 (33.2)	160,387 (74.1)	193,040 (89.2)					

出典：Annuario statistico dell'emigrazione italiana, p.168,p.196,pp.245-246 より作成。

(註) 職業は、15才以上の移民について1920年まで統計がとられている。項目は次の通り。

a：農業、牧畜、林業などに従事する者（項目cに該当するものを除く）

b：建築業従事者（れんが工、石工など）

c：農業労働者（常雇農、日雇い農など）

d：労働者（鉱山、金属、繊維など）ないし職人（指物師、織物職人など）

表8 ピエツラ郡における移民の行き先と性別

	サンプル数	ヨーロッパ	アメリカ	アフリカ	その他	合計	男性
地域1	936	39.32	37.82	17.84	5.02	100.00	66.6
地域2	658	58.51	7.29	6.54	27.66	100.00	59.6
地域3	617	36.95	47.33	11.02	4.70	100.00	57.2
地域4	308	42.53	28.57	8.44	20.46	100.00	63.6
地域5	516	91.47	6.98	0.58	0.97	100.00	61.6
地域6	328	62.80	25.00	7.02	5.18	100.00	60.4
地域7	3,242	40.59	43.12	10.61	5.68	100.00	60.8
地域8	1,991	31.79	34.30	30.39	3.52	100.00	65.6
地域9	483	33.95	32.30	4.35	29.40	100.00	66.7
合計	9,079						62.6

出典：G.Barberis, Geografia e struttura del movimento migratorio 1920-1960. in L'emigrazione biellese nel Novecento, p.37,p.39. 行き先と性別は割合 (%) で示してある。

表9 ピエツラ郡における移民の職業

	農民	建築	繊維	労働者	主婦	その他	合計
地域1	9	342	84	70	143	288	936
地域2	7	241	31	21	165	193	658
地域3	15	56	167	70	98	211	617
地域4	8	62	58	33	42	105	308
地域5	29	211	7	20	122	127	516
地域6	8	55	45	54	39	127	328
地域7	93	247	381	469	412	1,640	3,242
地域8	282	325	36	182	355	811	1,991
地域9	60	36	16	89	75	207	483
合計	511	1,575	825	1,008	1,451	3,709	9,079

出典：表8に同じ。

表10 ピエツラ郡のコムーネ別就業人口（割合）

	農民	建築	繊維	主婦	その他	合計
地域3	29	2	47	10	12	100
地域4 男性	23.3	39.9	28.0		8.8	100.0
女性	94.2		2.6	0.9	3.3	100.0
地域5 男性	13.6	42.3	0.2		43.9	100.0
女性	2.0		63.7		34.3	100.0

地域3—トリヴェーロ Trivero、1901年

出典：A.Lonni, Edili, boscarini e tessitori nell'emigrazione dalla val Sessera, in L'emigrazione biellese fra Ottocento e Novecento, p.299. グラフより作成。

地域4—ポストウワ Postua、1881年

出典：A.Lonni, I postuesi in Francia, in L'emigrazione biellese nel Novecento, p.50.

地域5—サーラ Sala Biellese、1878年

出典：P.Corti, Emigrazione e comunità nella Serra biellese: l'esodo temporaneo da Sala e Torrazzo(1800-1914), Studi emigrazione, 87, 1987, p.304.